

磯崎三喜年先生のご退職にあたって

A Tribute to Professor Mikitoshi Isozaki

森島 泰則 MORISHIMA, Yasunori

● 国際基督教大学
International Christian University

私が磯崎先生にはじめてお会いしたのは、多分、一般入試センター試験の時だったと思う。当時（多分、2004年から2006年のあたり）、私はICUに着任してまだ数年目で、(学科制の)語学科に所属していたので、教育学科所属であった磯崎先生との接点はあまりなかった。入試監督の休憩時間にたまたまテーブルが一緒になったとか、そういうことだったと思う。磯崎先生は気さくに冗談混じりで話しかけてくださり、私の専門が認知心理学・言語心理学で、学位も心理学であることなどに話が及び、博論のアドバイザーのことに触れたりすると、「ああ、あのKintschのところ学位を取られたんですか。」というようなことをおっしゃられたことを覚えている。共通点を持てたことが嬉しかった記憶がある。それ以来、学科は違っていても、顔を合わせると親しく接して下さった。それには、同じ心理学を専門分野とするということもあったらうけれど、それが磯崎先生のパーソナリティであったことは後で分かることになる。というのは、その後、2008年の教学改革の結果、私は心理学デパートメントに加わることになり、以来10年間、磯崎先生と一緒にICU学部、大学院での心理学教育に携わるようになったからである。

磯崎先生は、社会心理学を専門領域とし、特に友人関係ときょうだい関係、出生順位、自己評価維持と関係性維持の心理機制、社会的影響過程などの研究課題に取り組み、その研究成果は数多

くの学術雑誌論文、著書、主要学会での研究発表として公にされている。これらの学術的研究発表ばかりでなく、先生は、数多くのテレビ、ラジオ番組への出演や『週刊現代』『週刊朝日』『アエラ』などの一般誌への寄稿を通じて、広く一般市民へも研究成果を公表しておられる。また、磯崎先生の社会心理学、また心理学全般にわたる広い知識は、数多くの心理学、社会心理学の教科書や事典の執筆という形で結実している。その一つとして、現在私たちの『現代心理学入門』という科目で使っている教科書は、磯崎先生が中心となって心理学ファカルティが分担執筆したものである。

また、行政面では、大学院研究科長、心理学・教育学専攻主任、心理学および心理学・言語学デパートメント長を歴任され、学部、大学院でのプログラム運営に中心的な役割を果たされた。また、学外では、文部科学省大学設置審議会専門委員会委員などを歴任された。

磯崎先生は、長年、一般教育科目および学部、大学院の心理学の基礎科目から専門科目まで心理学全般にわたる科目を担当されたが、先生と学部や大学院でチーム・ティーチングを通して授業をご一緒することも多かった。教室での磯崎先生について語るならば、まず先生の講義は、上述のようにご専門である社会心理学をはじめ、心理学全般についてバランスのとれた専門知識に裏付けられた深い内容のものであった。また、古今東西の古典、文学、歴史などに渡る博識をお持ちで、

古典から引用したり故事に触れるなど奥行きの高い講義をされ、リベラルアーツの中の心理学として大変魅力的なものであった。そして、親しみとユーモアのある語り方で学生たちを巧みに授業に引き込んでおられた。同時に、様々な問題に対して心理学的視点とその他の視点を対比、統合しつつ、ものごとの本質に迫る問いを学生に投げかけ、心理学を専門とする学生ばかりでなく他分野を学ぶ学生にも学問的刺激を与えられた。

そのような授業をされる磯崎先生のもとには毎年多くの学部生が卒業論文指導を求めて集まっていたが、大学院でも多くの大学院生を指導し、博士号取得者も多く輩出しておられる。磯崎先生のもとには国内だけでなく、中国、タイ、ミャンマー（ビルマ）、スウェーデン、イタリア、アメリカなど海外からも大学院生が集まり、国際色豊かな研究室を形成し、ICUの国際性にも大きく貢献しておられた。常に精緻な研究方法と論理構成を重視し、学生の研究能力の向上を目指す指導によって、これらの学生が1年目、2年目と進むにつれて、その研究力を伸ばしていくのを見させて頂いた。

教学改革以後の10年間は、ICUは学科制からメジャー制への変革があり、それに伴って教員組織も一度ならず改変があったりと大きな変革の時代だったと言える。この間、心理学プログラムも、カリキュラム、教員組織、学生指導などについて大小様々な課題に直面した。その都度、心理学ファカルティは協議を重ね、問題解決に対処してきたが、その中であって磯崎先生は、栗山先生、ラッカム先生、小谷先生の在職中であっては中堅として、その後これら諸先生退職後は、まさに心理学の屋台骨として中心的存在だったと言っても過言ではない。何か課題が持ち上がるとよく、磯崎先生のオフィスに行き、多くの書籍に囲まれた部屋のソファに座って話し合ったことを思い出す。そのような会合では、当該の問題についての話し合いからいつの間にか話題は、大学院時代からの経験談や社会情勢へと発展して行き、時間を忘れてときには夜遅くまで話し込んでしまうこともしばしばだった。私はそのような雑談的な話の中から、大学教育のあり方や教員のあり方について磯崎先

生から多くを学んだ。

最後に、心に深く刻まれていることとして、私事であるが、父の葬儀の際に西村馨先生と一緒に静岡まで来てくださり、ご参列くださったという思い出がある。お二人の姿を式場で見、ご挨拶を受けたときには、涙がこぼれ、なんとも言えぬ一体感を感じたことを忘れることができない。テニスなどのスポーツで鍛え、いつも若々しい磯崎先生がご退職の年齢に達しているとは、正直、心理学ファカルティの誰も気がつかなかった。未だに信じられないことだというのが率直な印象だが、どうもこれは現実らしい。ご退職後もICUに来て頂く機会はあると思うが、これまでのようにゆっくり話をしたり、一緒に授業をしたり、そして、屋外にあってはあの大きなサングラス、屋内では草履ばきという親しみ深いお姿を見れなくなるのかと思うと寂しい限りである。ここで、これまでの先生の数々のご貢献に深く感謝し、ICU心理学プログラムをしっかりと引き継いでいくことを他の教員とともにお約束したい。